

船岡紫野の「アジュール性」の変化

—戦国時代までの葬送と祭礼から見る京都北郊の都市領域の変遷の分析—

2023 年 11 月 9 日
中谷研究室 解築学ゼミ
1X20A109 野々村葵

0. 目次構成

【序論】

第0章 本論文について

- 0-1 研究の目的と背景
- 0-2 研究方法
- 0-3 研究対象
- 0-4 既往研究と本研究の位置づけ

【本論】

第1章 平安前中期

- 1-1 はじめに
- 1-2 異界としての紫野
 - 1-2-1 行楽の地紫野
 - 1-2-2 葬送の地紫野・蓮台野
- 1-3 異界との境界としての船岡
 - 1-3-1 平安京の北側境界線
 - 1-3-2 今宮社と紫野御霊会
- 1-4 小結

第2章 平安末期から鎌倉時代

- 2-1 はじめに

- 2-2 葬送の地と市街地化
- 2-3 当時の祭礼
 - 2-3-1 今宮祭
 - 2-3-2 夜須礼の突発、弾圧、そして復興
- 2-4 小結

第3章 南北朝と室町前期

- 3-1 はじめに
- 3-2 葬送の役割の喪失
- 3-3 都市祭礼化した今宮祭とヤスライハナ
- 3-4 大徳寺の創建
 - 3-4-1 初期から厚遇された大徳寺
 - 3-4-2 私寺に戻った大徳寺
- 3-5 小結

第4章 戦国時代と織豊期

- 4-1 はじめに
- 4-2 蓮台野
- 4-3 祭礼
 - 4-3-1 今宮祭

- 4-3-2 ヤスライ花

4-4 大徳寺

- 4-4-1 一休宗純と紫野文化
- 4-4-2 大徳寺と権力者
- 4-4-3 織豊期の大徳寺
- 4-5 小結

第5章 考察

- 5-1 はじめに
- 5-2 紫野・蓮台野
 - 5-2-1 蓮台野の人々
 - 5-2-2 紫野のアジュール性
- 5-3 船岡の境界線の形骸化
- 5-4 祭礼
 - 5-4-1 都市祭礼の利用
 - 5-4-2 今宮社からみる紫野のアジュール性
- 5-5 小結

【結論】

第6章 結論

【序論】

第0章 本研究について

0-1. 研究の目的と背景

本論文では、船岡紫野地域の葬送、祭礼、大徳寺の三要素を横断して分析することで、京都北郊の都市領域の複雑化の過程を追い、船岡紫野という土地が持つ役割の変遷を考察することを目的とする。

0-2. 研究方法

対象について、葬送、祭礼、大徳寺の3要素それぞれについての既往研究を元に分析する。研究対象の年代は平安京造営（794年）から織豊期の直前、16世紀中葉までである。章ごとの時代区分を図1に、対象地域を図2（レジュメ裏面）に示す。

0-3. 対象

現京都市北区にある船岡紫野地域について、平安京造営から織豊期の最後まで既往研究などの文献から注目する。

0-4. 既往研究と本研究の位置づけ

京都北郊に絞ってマクロな視点で都市領域の変遷を分析する研究は行われていない。

- 星野裕司，斎藤潮（2000）.「平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究」『都市計画論文集』35巻，p. 793-798.

本研究では、福田アジオの領域論を平安京に適応させ、「ノ」を無縁性を持つ中間地と定義づけている。

- 本多健一（2013）.『中近世京都の祭礼と空間構造』吉川弘文館．

史料が比較的豊富な平安京中期頃の今宮祭だけでなく、近世まで変遷を分析していることが特徴である。今宮社の氏子区域の変化などから、都市祭礼となった今宮祭の実態までも明らかにしている。

- 斎藤夏来（1997）.「五山十刹制度末期の大徳寺：紫衣事件の歴史的的前提」『史学雑誌』106巻7号 p. 1263-1295.

中世後期の大徳寺の権力や性質について考察している。妙心寺の紫衣勅許に対する反論などから幕府と朝廷との関係や、権力を求める外護者に利用されつつ大徳寺自体も権力を求めていることを推察している。

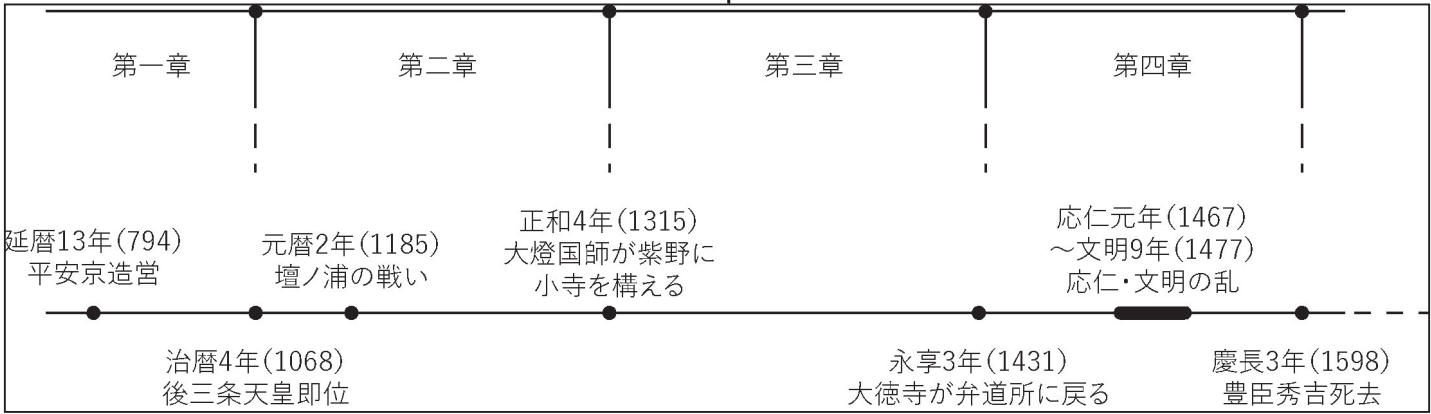


図1 本論の時代区分

【本論】

第1章 平安前中期

紫野は都市と自然の中間地、行楽と葬送が両立する異界であった。

- 遊猟のための離宮、貴族もよく遊覧に及ぶ行楽地
- 蓮台野（紫野の一部ともされる）は貴族の葬送地

船岡は紫野＝異界と平安京の境界であった。玄武を担う北の守り神であり、平安京の人々は船岡から虫送りをしたり神を迎え入れたり、異界の出入口として扱っていた。平安京内の疫病に対し、紫野御霊会が大眾によって船岡山頂で正暦五年（994）に、官祭的性格を増して紫野で長保三年（1001）に行われた。後者が年中行事として根付き今宮神社となる。

第2章 平安末期から鎌倉時代

平安末期から平安京は廃れ始め、13世紀には大内裏や一条以北も市街地化されていた。京都の治安は非常に悪く、災害も頻発していた。

紫野は行楽地ではなくなり、蓮台野は京都を代表する墓地になった。船岡では処刑（1156年）や上人の焼身自殺（1174年）が行われたことが記録に残っている。また、1304年には蓮台野に葬送に関わる被差別民が住んでいた。

紫野御霊会は今宮祭と呼ばれるようになり、疫病が流行した年にのみ行われていたとみられる。仁平四年（1154）には今宮社で左大臣に対するデモとみられる夜須礼が発生し、数日で弾圧された。魚口の面を被って踊り叫び狂う形態をとっていたとみられる。それは、貴族が民間の疫神送りの形態と大衆の反頼長の感情を利用し、現役の大臣を疫神とみなし追い出すものであった。その2年後、後白河天皇政権によってヤスライは左大臣頼長に代表される政治的動乱との決別を象徴する祭礼として復興されたが、1200年頃には官祭としては中止されたとみられる。

第3章 南北朝と室町前期

朝廷と幕府両方が権力を持つ複雑な時代であった。蓮台野の墓地が廃止され、跡地に人家が建てられたことで紫野の葬送の役割はほとんど失われた。被差別民は変わらず住み続けていたとみられるが、同時に武士など被差別民以外の人々も住んでいた。

朝廷が疫病の流行に対して今宮祭を再開させるも、その40年後の1364年頃には朝廷の手を離れて都市祭礼化した。特に、1367年には京都の他の都市祭礼と比べてかなり遅れて市街地に御旅所を置く形態をとるようになり、都市住民が主催の祭礼であることが明確化した。疫病退散の祭りであることは変化していない。ヤスライの記録は残っていないが、官祭でなくなった後も郷の民が続けていたとみられる。

嘉暦元年（1326）に勅を受けて開堂した大徳寺は、初期から権力者からの厚遇を受けていた。後醍醐天皇、花園上皇両者から南北朝両方の公式の祈願所とされた他、土地などの寄進を受けた記録が数多く残っている。大燈国師に参禅し寄進した花園上皇に対し、建武の新政を始めたばかりの後醍醐天皇は権力を誇示するために外護していたとみられる。後醍醐天皇に元弘三年（1333）には五山第一位、その翌年には南禅寺並みの上刹とされるほど重要視され、後醍醐天皇花園上皇両者から本来の五山制度から外れる一流相承刹も認められていた。しかし、南朝が衰退し室町幕府の権力が強まるにつれそのまでの厚遇はみられなくなった。至徳三年（1386）には本来の五山制度を重要視する足利義持から土利九位とされ、永享三年（1431）には五山十刹から外れ私寺に戻ると申し出て、一流相承刹に戻った。しかし、その後も幕府からは十利として扱われていたとみられる。

第4章 戦国時代

室町幕府が衰退し、戦国大名が力をつけた時代である。応仁の乱や天文法華の乱などで京師が再び荒れた。蓮台野に墓地はなくなったものの、北野社に使える河原者集団は住み続けていた。1490年に北野社に訴えた「千本赤」の事例から、彼らは死穢と接触することを専門とし職能集団を結成し、河原者集団同士で利益を争っていたことがわかる。その後、16世紀末に豊臣秀吉によって有名人の墓地として再び葬送地となった。

完全に都市祭礼化していた今宮祭は、他の諸祭礼同様応仁の乱で中断された。しかし、当時の将軍義尚が氏子であったことから幕府の手厚い後援を受け、他の都市祭礼と比べて異様に早く復興した。その後、再び政治権力の手を離れ、西陣の有力商工業者主催の都市祭礼として復興した。ヤスライ花は300年ぶりに記録に登場し、疫神送りではあるものの、当初とは大きく違う、中世後期の風流を模した郷の祭礼となっていた。当時の貴族や大衆が物見遊山に訪れている。大徳寺では、一休宗純を起点に茶の湯など紫野文化が花開いた。大徳寺は禅と茶の湯で戦国大名や堺の豪商を外護者として取り込み、また、塔頭などの寄進を通して大名や朝廷と良好な関係を築いていた。その結果、大徳寺は複数の強力な経済基盤を築き、当時の五山よりも裕福な存在となった。それに加え、15世紀後半以降の大徳寺は、朝廷から再び南禅寺並みの権力を与えられていたとみられる。大徳寺の文化を媒介に様々な有力者が集う場所となったことで、大徳寺の政治的重要性はさらに増した。様々な戦国大名の中でも特に秀吉とその臣下は大徳寺とその政治的利用価値を重要視し、大徳寺は秀吉政権下のような存在となったほどであった。

第5章 考察

5-2. 紫野・蓮台野

被差別民は、元々はケガレを清められる存在として都市住民にとって差別の対象であると同時に畏怖の対象であった。彼らが後醍醐天皇を始めとした権力者に利用されるようになり、職能集団として利益を競い合うようになって畏怖の側面が薄れたと考えられる。つまり、蓮台野の墓地が廃止され、かつ被差別民も北野社に仕える職能集団となったことで、蓮台野の葬送の地としての性質はほとんど失われたとみられる。

紫野は、平安京造営時に行楽と葬送が共存するアジュール、都市（サト）と自然（ヤマ）の中間地としての役割を与えられている。しかし、異界との交流、つまり遊猟の拠点であった紫野院跡に権力の一大拠点である大徳寺が創建されたことは、当初の役割が大きく薄れたことを意味する。大徳寺は政治的動乱に影響され続けてきた権力者にとって非常に都市的な存在であるが、京師の一般大衆とは特別深い関係があるわけではない。しかし、大徳寺は様々な有力者が禅と茶の湯を媒介に従来の格式を無視できる特異な存在であった。つまり、紫野の無縁性、アジュール性は本来権力者の都市内ではあるべき格式と無縁でいられる場所、を意味するように変化し、大徳寺を通して継続されている。

5-3. 船岡の境界線の形骸化

10世紀以降の平安京北郊の市街地化は、船岡以南にとどまっている。しかし、平安末期からの船岡は処刑や自殺、夜須礼の舞台に選ばれるパフォーマンス性の強い場所に变化した。そして、応仁の乱では戦乱の舞台となった。つまり、平安中期にはまだ都市の境界線として機能していた船岡だが、平安末期になり治安が悪化してからその境界線性は形骸化し始め、最終的に応仁の乱で戦いの舞台となったことで、完全に都市に取り込まれ、境界線性は失われている。

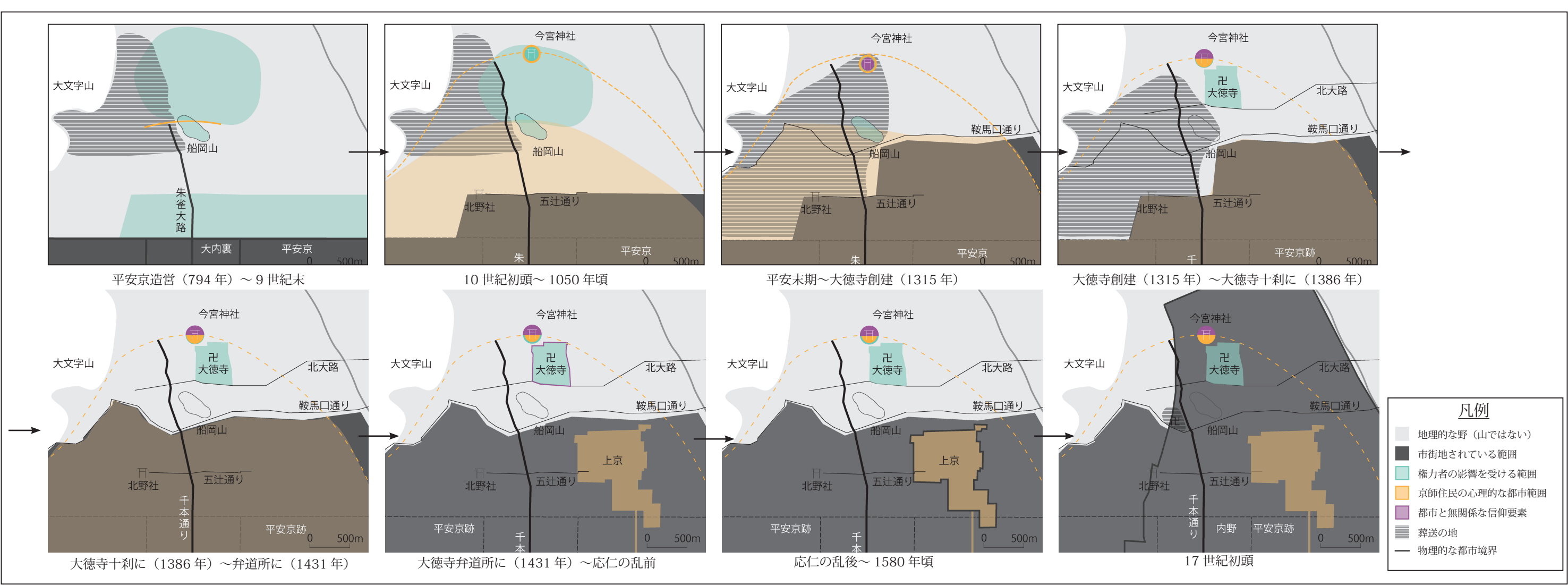


図2 京都北郊の都市領域の変遷

5-4. 祭礼

今宮祭とヤスライ花の変遷から、都市が即物的な境界を失い地霊、人々、行事などが複雑に絡み合う概念的な存在に変化していることがわかる。

平安末期以降、今宮社は都市祭礼である今宮祭と郷の祭礼であるヤスライ花が共存する場所と変化している。祇園会から、都市祭礼は都市住民の祭りであると同時に支配者の平和の誇示のツールであるといえる。今宮祭も同様であり、都市祭礼であることから都市や政治的動乱の影響を受けやすい。しかし、郷の祭礼であるヤスライ花は、動乱で中断していたとしても権力者の後援なく復興、続行されている。住民の祭礼が滞りなく行われるのは平和の象徴であり、その強調に使われる祭礼が都市の外側だと滞りなく行われていることは、権力者にとっての大衆都市の理想がすぐ近くの郊外にあることを示唆する。そして、都市的であることは動乱と関係することを意味し、その指標に沿って分析すると都市が郊外的になろうとすることで自らの良さを強調しようとしている点を指摘する。

また、都市祭礼と郷の祭礼が共存できることは、従来の形式、格式との無縁性を持つ紫野のアジュール性を改めて示唆する。

5-5 小結

図2に京都の都市領域の複雑化の過程をまとめた。以上より、京都北郊の都市領域が「物理的境界（市街地化、塀や堀）・権力絡みの動乱に影響を受けやすいか・京師の一般大衆にとって心理的に都市と認識されるか」の3つの指標の重なり合いで決定される複雑なものへと変化していることがわかる。

元々は自然と市街地の中間、葬送と行楽の共存する場所であった船岡紫野が大衆にとっての都市の範囲に入ったり外れたり、権力者にとっての都市の飛び地となったりしていることがわかる。最終的に秀吉が御土居を作ったことで船岡紫野は物理的に都市の範囲内となり、権力者にとって都市の範囲内に入ったことが裏付けられる。しかし、それでも上京下京に凝縮された大衆にとっての都市の範囲は広がらないため、大衆にとってはほとんど無関係な場所のままである。御霊社の作る境界線が形骸化したことで、平安京にとって唯一無二の存在だった船岡紫野は近世京都の一郊外へと変化している。

初期の船岡紫野は、市街地の外でありながら、権力者と京師住民にとっては都市の重要な要素であるという特性を持っていた。しかし、御土居の内側に入ったことで、市街地の中でありながら、大衆都市の外側である、郊外へと変化している。権力者にとって都市的になるにつれ、大衆との心理的距離が開いたと考えられる。

【結論】

第6章 結論

船岡紫野は、平安京の起点として、ケガレと無縁でいられるアジュールとして始まった場所である。大衆都市と権力都市、実際の市街地の範囲に差が出始めたことで京都の境界線が複雑化し、豊臣秀吉政権で船岡紫野は正式に権力都市の範囲内に入った。その変遷の過程で当初のアジュール性が形骸化し、格式や形式として無縁でいられる場所、として意味を変えて大徳寺にて表面化している。

主な参考文献

本多健一 (2013).『中近世京都の祭礼と空間構造』吉川弘文館.
星野裕司, 斎藤潮 (2000).「平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究」『都市計画論文集』35 巻, p. 793-798.
斎藤夏来 (1997).「五山十刹制度末期の大徳寺：紫衣事件の歴史的前提」『史学雑誌』106 巻 7 号 p. 1263-1295.
河音能平 (1984).「ヤスライハナの成立」『中世封建社会の首都と農村』東京大学出版会 . p. 55-123.
京都市編 (1993).『史料京都の歴史 第6巻（北区）』平凡社.
古橋信孝 (1998).『平安京の都市生活と郊外』吉川弘文館.
岡田荘司 (1994).『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会.
五島邦治 (2004).『京都 町共同体成立史の研究』岩田書院.
竹貫元勝 (2010).『紫野大徳寺の歴史と文化』淡交社.
山田宗敏編, 伊藤克己補訂 (1993).『史料大徳寺の歴史』毎日新聞社.
高橋康夫 (1983).『京都市中世都市史研究』思文閣出版.
丸山俊明 (2023).『図説 京の町家史』住環境文化研究所.
高橋康夫 (1983).「十世紀の平安京一条北辺の開発について：桃園殿を中心に」『日本建築学会論文報告集』328 巻, p. 146-152.
山田邦和 (2009).『京都都市史の研究』吉川弘文館.
早島大裕, 大田壮一郎, 松永和浩, 吉田賢司, (2022).『京都の中世史5 首都京都と室町幕府』吉川弘文館.
竹村俊則 (1984).『昭和京都名所図会5（洛中）』寝々堂出版.
山路興造 (1987).「「やすらい花」再考」『民俗芸能』68 号 . p. 6-20.
脇田晴子 (2002).『日本中世被差別の研究』岩波書店.
網野善彦 (2001).「日本中世における差別の諸相」奈良人権・部落解放研究所編『日本歴史の中の被差別民』新人物往来社 . p. 9-35.
宮田登 (2001).「差別観念・ケガレ意識を考える」奈良人権・部落解放研究所編『日本歴史の中の被差別民』新人物往来社 . p. 37-70.
竹貫元勝 (1972).「林下における住持制度と教団経営について - 特に大徳寺の場合を中心として -」『印度學佛教學研究』21 巻 1 号 p. 275-278.
垂水稔 (1989).「結界の構造と表現に関する環境論的研究」大阪大学博士論文 p. 153-169.

画像出典

図1: 筆者作成

図2: 山田邦和『京都都市史の研究』p. 67, 古橋信孝『平安京の都市生活と郊外』p. 1, 高橋俊也ほか「「蓮台野」（京都左大文字山麓）の空間的特質に関する考察」, 岡田章雄ほか『日本の歴史』第3巻（平安貴族）折込み2, 藤田元春『都市研究平安京変遷史』口絵, を元に筆者作成。